

原著論文

ゲシュタルト心理学と現象学  
— 「立ち消えになった認識革命」からの出発

渡辺 恒夫<sup>1</sup>

**Gestalt Psychology and Phenomenology: Starting again from the  
“miscarried epistemological revolution”**

**Tsuneco Watanabe<sup>2</sup>**

**【Abstract】** Takahashi (2016) found “miscarried epistemological revolution” in Gestalt psychology. To examine her idea, this paper investigated the nature of the psychological explanation in Gestalt psychology. The law of proximity, one of the Gestalt laws of perceptual organization, was examined. As a result, two points were suggested. First, this “law” does not refer to the causal relationship in the so-called scientific explanation, but to the meaningful relationship between two subjective impressions. Second, the latter relationship can be phenomenologically elucidated on the basis of “figure and ground,” the most fundamental phenomenological structure in perception. Phenomenological elucidation is a process of identifying phenomenological structures behind each individual case of experience. This method may be applied not only to Gestalt psychology but also to other domains with psychoanalytic concepts such as “identity.” Finally, the possibility of rewriting the history of psychology was discussed, while reexamining a considerable number of psychological concepts and explanations by the method. This effort of “rewriting” would make a starting point from the “miscarried epistemological revolution” toward an alternative psychology.

**【Key Words】** epistemological revolution, law of proximity, psychological explanation, phenomenological elucidation, identity

---

<sup>1</sup> 東邦大学名誉教授。心理学サイドから心理学の哲学を試行してきましたが、近年は現象学に傾倒しています。著書に『夢の現象学・入門』（講談社選書メチエ、2016）、『人文死生学宣言』（共編著、春秋社、2017）など。

<sup>2</sup> Emeritus Professor at Toho University. Funabashi, Chiba, Japan. Email: psychotw@env.sci.toho-u.ac.jp

## 1. 問題

近年、文庫化新装版が出た『心の科学史』[1]の中で高橋は、デカルト以来の近代心理学史を、方法革命と認識革命のくりかえしとしてとらえる独自の構想を示している (pp. 37-50)。方法革命の第1弾は19世紀後半ヴントらの実験的内観法(内省のみによる意識の質的分析から実験の併用による意識の統制的かつ量的分析へ)であり、第2弾は20世紀初頭ゲシュタルト心理学(分析加算の実験から現象学的実験へ)であるが、より重要なのは、認識革命の方である。これは、第1弾は17世紀のデカルト的「我(意識)の発見」に始まり、意識を外的世界と並ぶもう一つの広がりのある内的世界として外的世界と類比的な分析的学問の対象に変えてしまったロックと連合心理学。第2弾は20世紀初頭の行動主義による「私秘性の排除」(それまで自明だった意識、内面世界を、操作的定義による構成概念と化してしまう認識論上の革命を実行した行動主義によって、実験心理学は真の意味で自然科学=近代科学の仲間入りをした)。これにさらに第3弾として、ゲシュタルト心理学者による「立ち消え」(p. 50)になった認識革命(現象そのものから出発すれば、物的と心的の違いも視点の違いに解消され、心身二元論が乗り越えられるはず)が付け加わる。そして、そのような心理学の登場もしくは復興を期待して高橋は、「これはまた、ある種の“現象学”と呼ばれてもしまかべきものでもあろう」(p. 223)と言うのである。

著者は、高橋が詳らかにしなかった「立ち消えになった認識革命」の可能性を明らかにするためには、(1)ゲシュタルト心理学の営為の最も本質的な部分は現象学にあり、それも高橋がためらいがちに言う「ある種の」どころか、現象学そのものであると言ってよいこと。(2)現代に質的研究や認知神経科学の一部として復興の兆しを見せている現象学的な研究も、ゲシュタルト心理学からの方法的連続性の下に把握可能であること。(3)ゲシュタルト心理学者の師の師にあたるブレンターノの名著『経験的視点からの心理学』[2]はヴントの『生理学的心理学要綱』と同年(1874)に出版されているが、(1)(2)を踏まえればヴントではなくブレンターノにまで遡られフッサールが方法論的バックボーンを水面下で提供している「もう一つの心理学史」の構想が立てられる可能性があること<sup>1</sup>。これら3部からなる研究が必要になると考える。本稿はそのうち主として(1)を扱うが、それは、上記の課題に本格的に取り組むのには、現象学者、心理学と哲学の学史家、認知科学者などを含む学際的共同研究が必要となるが、質的心理学研究としての現象学を専門とする著者としては、まず(1)の課題に取り組むことで、(2)(3)と続く一連の学際的研究への呼び水としたいからである。

## 2. ゲシュタルト心理学の現象学的解明

---

<sup>1</sup> この構想の(3)の部分は、質的心理学における論客の一人であるJ. Valsiner [2]の次の言葉に示唆を受けている。「1874年には、この学問[心理学]の後の発展を形作るのに寄与した二冊の偉大な書物が現れた。一つはより知られているが、ウィルヘルム・ヴントの『生理学的心理学要綱』である。しかしながらいま一つの、フランツ・ブレンターノの『経験的立場からの心理学』(Brentano, 1995)も同様に重要である。ブレンターノに発する思想の歴史的つながりは、グラーツのアレクシス・マイノング、エドムント・フッサール、そしてカール・シュトゥムプへと導くのである」(p. 43)。ただしValsinerもこの「歴史的つながり」を具体的に述べているわけではないので、今後の検討課題にとどまる。

## 2-1. 群化・体制化の要因はどのような意味での「法則」か？

図1は、標準的な心理学テキストの知覚の章で、必ずと言ってよいほど見かける図であって、ゲシュタルト心理学の創始者、ヴェルトハイマー[3]の図に基づいている。群化の要因は体制化の要因とも呼ばれ、後年、ゲシュタルトの法則とも呼ばれることになった。この中で(a)接近の要因とあるのは、近接したもの同士がまとまって知覚される、ということを述べたものである。1から6まで黒円に番号をふってあるが、[1, 2] [3, 4] [5, 6] というように近接したもの同士をまとまりとして私たちは知覚するのであって、[2, 3] [4, 5] というように距離の離れた同士をまとまりとして知覚することはない、ということである。(b)類同の要因とは、白円同士と黒円同士というように似たもの同士がまとまって知覚されるのであって、隣り合っているからといって〔白、黒〕〔黒、白〕〔白、黒〕というようなまとまりとして知覚することはない、ということである。群化・体制化の要因が、ゲシュタルト心理学派の手になる心理学史上の最も基礎的な発見の一つと見なされ続けていることは、現代の権威ある教科書とされる『ヒルガードの心理学第15版』[5]

(p. 230)の中でも、「群化のゲシュタルト決定因」の図としてこの5つの要因が、やや趣向を変えてであるが原理的にはほぼそのまま出ていることでも分かる。

しかしながら、この群化の要因なるものには、何となく釈然としないところがある。近接したもの同士

がまとまって知覚されるなど、何だか当たり前すぎるではないか。もしこの「要因」を、AはBの要因であるといった場合の原因-結果の関係で解し、法則的關係をそこに見るのなら、たとえばニュートンがリンゴの枝から落ちるのを見て「すべてのリンゴを含めた重いものは地面に落ちる」と定式化して万有引力の法則と名づけたといった類いのものになるのではないか（ニュートンの林檎の話は史実ではないという議論があるが、「たとえば」の話として引き合いにだしているのであって、史実云々の議論は無関係であると考え）。万有引力の法則が法則の名に値するのは、月や惑星の動きをも同じ法則で説明できたという、つまり当たり前でないことをも説明可能にした、ということにあるのではないか。

これが、現在、ゲシュタルト心理学の基本的な文献と言われるコフカ『ゲシュタルト心理学の原理』[6]となると、次のように説明されることになる。「近接の法則は近接部分の同等性を前提としている。このような限界をもつてもこの法則は十分重要である」(p. 191)。「以上の検討から、近接と同等の法則を次のように定式化できる。場の2つの部分は近接と同等の程度に応じて相互に

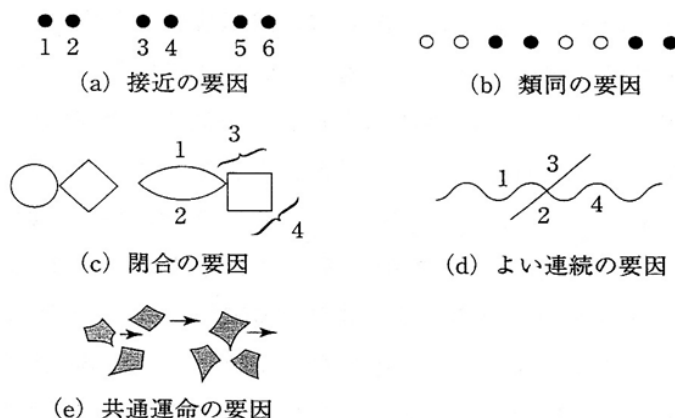


図1 大山[4]、p. 51、「図2.15 群化の要因 (Wertheimer, 1923)」とある図より一部を改変・引用。「接近」は「近接」のこと。

引き付け合う」と (ibid. p. 192)。ちなみにここで「同等」といっているのは、「類同の要因」でいう「類同」と同義とみなしてよい。ここで明示的に「法則」という語が用いられているが、このコプカの説明には、当たり前でないことをも説明可能にするという、科学的説明への志向が窺われる。「近接と同等の法則」は、近接と同等の程度に応じて二つの部分が「まとまって見える」ということを言っているだけではなく、近接と同等の程度に応じて二つの部分が「相互に引き付け合う」ということをも述べているのである。つまりここには、「相互に引き付け合う」という、直観を超えた原理が想定されているように見える。それはたとえば、木から落ちるリンゴという直観的な現象の底に、「相互に引き付けあう」(=万有引力)という直観を超えた原理を想定することに似ている。事実、ゲシュタルト学派ではすでに1920年にケーラーの心理物理同型説が登場していて、心理的ゲシュタルトには生理的ゲシュタルトが同型的に対応し、さらに後者は物理的ゲシュタルトに同型的に対応するという、心身並行論的な階層構造が想定されているのである[7] (p. 29 など参照)。

けれどもこれでは、哲学に造詣の深い生物学者のヴァイツゼッカー[8]も批判しているように、ゲシュタルト心理学が本来めざしていた、性急な生物学的物理学的説明を退けて現象そのものを明らかにするという方向性からの、後退という外ない。

「ゲシュタルト心理学はゲシュタルトの『超加算的』性格をひとたび明確にとらえておきながら、生物学の研究原理としての説明ということをも十分な徹底さでもって捨て去らなかった。そしてこの態度が、ケーラーの自然哲学における心身並行論への逆行という報いを招いたように思われる」 (p. 47)。

後年、ゲシュタルト心理学が、生理的・物理的ゲシュタルトによる説明だけではなく、図における「よい連続」や「よきゲシュタルト」の「よい」ということの意味を情報量の多寡によって説明するなど[9]、要するに「意味」を「意味でないもの」によって説明する方向へと走り、認知科学・神経科学の大波の中に雲散霧氷してしまった遠因も、この辺にあると思われる<sup>1</sup>。

それでは、ゲシュタルト心理学が本来めざすべきであった方向性とは何か。それを以下に2段階に分けて明らかにしていこう。

## 2-2. 群化の要因とは主観的現象と主観的現象の間の意味上の連関のことである

そもそも「近接したもの同士がまとまって知覚される」という近接の要因における「近接」とは何か。これを「物理的に近い距離」と取れば、「まとまり」という主観的現象の底に現象を超えた物理的過程を想定して、自然科学的な説明を試みるという発想が出てきてしまう。が、事実近接の要因とは、「近接して知覚されるという現象」と、「まとまって知覚されるという現象」との間の、つまり主観的現象同士の間での連関を述べたものなのである。

このことを明確に指摘した例は心理学サイドでは少ないが<sup>2</sup>、柿崎 [12] (pp. 283-285) は、東京大

<sup>1</sup> 最近の現象学者による次の評言も参照のこと——「大半のゲシュタルト主義者は、因果的で、自然主義的な知覚と認知の理論をみずからの目標と考えた。しかし、アロン・グールヴィッチを始めとする現象学者の考えによると、この点は最終的に矛盾をはらんでおり、ゲシュタルト理論は現象学として解釈されるべきである」 [10] (p. 103-104)。

<sup>2</sup> 哲学サイドではアロン・グールヴィッチ[11]がすでにこの点を指摘している。「一般に現象的領野の中では、少なくとも当初は、解析幾何学的意味での質的に中立的な距離が問題なのではない。現象的“距

学の高木[13]によって1940年に発表された実験を引用しつつ(図2)、近接の要因における近接とは物理的距離(=遠刺激)のこともなければ網膜上の距離(=近刺激)のこともなく、「近接して知覚されるという主観的現象」のことでありと説いている。「近接しているものはまとまって知覚される」とは、「主観的に近接して知覚されるものは主観的にまとまって知覚される」という、主観的現象相互間の関係を述べたものなのである。同様にして高木の実験から、類同の要因における類同というものも物理的に定義されるような類似・同等ではなく、「主観的に類似・同等として知覚されるものは主観的にまとまって知覚される」ということであることが分かる、と言う。

主観的現象相互の関係を述べたものである以上、そこに物理的刺激と主観的感覚の間の法則的因果関係のようなものを想定することはできない。「近接して知覚されるものはまとまって知覚される」ならば「まとまって知覚されるものは近接して知覚される」という、逆の関係も可能になるはずだからである。事実、そのような知見はその後の実験的研究によっても得られている。

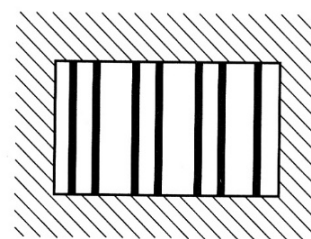
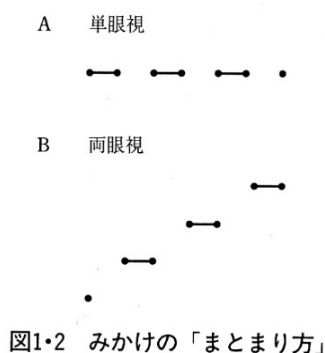


図1.2 みかけの「まとまり方」

図1.3 単眼視でのみえ方 (実際は黑白逆)

図2 単眼視では原図 1.3 のように網膜上の距離の「近接」がまとまりのための要因となるが、奥行距離感が働く両眼視では原図 1.2 (上から見た刺激位置に基づくまとまり方) のように、奥行距離感上の「近接」が要因となる。柿崎[11](p.283)より図引用。

ゲシュタルトの決定因と結びついた確かな錯覚がある。人は異なる群の要素間の距離よりも、知覚群内の要素間の距離のほうを短く判断する(Coren & Cergus, 1980; Enns & Gergus, 1985)。これらの結果のすべては、私たちが視覚経験を体制化するという点で、視覚的群化が大きな役割を果たしているということを示している[5] (p. 231)。

群化・体制化の要因とは、自然科学的な因果的法則的説明では何らなく、「近接」という主観的現象と「まとまり」という主観的現象の間の、つまりは「近接という意味」を担った現象と「まとまりという意味」を担った現象の間の連関を明らかにしているのだと、解されるのである。「2点間に成立する<近接>という意味が十分に強くなれば<まとまり>という意味へと転化する」というような。

けれども、意味現象相互間の連関を明らかにするだけでは、記述現象学といえども、自然科学的な心理学と拮抗するだけの人間科学 (Human Science) としての現象学の域には程遠い。人間科学としては、「なぜ？」の問いに答えうるだけの、説明の体系を備えなければならない。ここでの例でいうなら、「なぜ近接して知覚される2点同士はまとまりとして知覚されるのか」という問いに<sup>1</sup>。

離”は常に質的な特徴を呈している。それゆえ語の純粹な意味での距離ではない。」(p.219)

<sup>1</sup> 「なぜ」ではなく「いかに」が科学的説明の目標ではないか、と言われるかもしれない。けれども、ニュートンはリンゴが木から落ちるのを見て「いかに落ちるか」という問いを起したわけではないで

### 2-3. 現象学的解明とはなにか

「なぜ？」の問いに答えるには、自然科学的な因果的法則的説明以外に、人間科学に固有な方法として理解・解釈による方法があるというのが、ディルタイ[14]以来のいわゆる人間科学の方法論争の中で主張されてきたことだった[15]。けれども著者は、現象学的に「なぜ？」に答えることは、自然科学的説明とはもちろんのこと、人間科学的理解とも異なる、現象学的解明という方法に拠らなければならないと考える。この3者の違いが最近、渡辺[16]によって簡潔にまとめられたので、紹介しておく。

現象学的に「解明する」(Aufklären)ことが科学的な「説明する」(Erklären)ことと異なることについては、フッサール(1965/1950), p. 15 訳註\*\*に説明がある。……自然科学の方法を「説明」(explanation)とし、人間科学独自の方法を「理解」(understanding)とするという立場(丸山, 1985; ウリクト, 1984/1971 参照)を取るとして、本研究での「解明」と三者比較をすると、以下のようなになる。**説明**: 個別事象を一般法則に包摂すること。これによって過去へ向かつては「原因による説明」が、未来へ向かつては「予測」が、可能になる。**理解**: 「理由」によって、たとえば「彼女が窓を開けたのは部屋が蒸し暑いからだ」と説明すること。理由による説明が原因による説明と異なることは、例文が「彼女は部屋の蒸し暑さを減じるために>窓を開けた」と、目的論的説明に変換可能なことから分かる。**解明**: 個別的現象を、現象のより基底的・普遍的な構造に還元して理解すること。たとえば「なぜベジータに変身すると想像しても現実には不可能なのに夢の中では変身できるのか」という問いに対し、現実世界と夢世界での、志向的意識の構造上の差異に還元して答えること(渡辺[16]p. 84)。

ここで、典拠として挙げられている「フッサール(1965/1950), p. 15 訳註\*\*」を見ると、次のような訳註の文章がある。

フッサールによると、説明とは個を一般的法則から、そしてさらに後者を根本法則から概念的に明らかにすることであり、そこではある出来事<sup>1</sup>の自然法則的必然性が追及され、演繹ないし機能によって経験的理論が立てられるのである(それ故、説明には「因果的」という形容詞がつく場合がある。z. B. L. U. I, S. 68)。したがって説明は事実の世界について、物理学や心理学などリアルな科学と形而上学の分野でなされるのである。それに反して解明は純粋経験とそれに属する意味成素の本質構造に関する認識現象学の枠内で、本質直観により、アプリオリなもの<sup>2</sup>のイデア的なものについて行われるのである(p. 154)。

訳註にしては難解な説明であって、一読して理解できる心理学者がいるとは思えない。この訳註が付されている『現象学の理念』[17]の本文にしても、さらには「解明」(Aufklärung)の語が頻出するフッサール前期の代表作『論理学研究』[18](たとえばp. 28)を読んでも同様に難解である。それゆえ「フッサール現象学における解明とはなにか」という学史上の問題は、哲学史家との共同

---

あろう。「なぜ落ちるか」という「なぜ」の問いから出発して、「いかに万有引力が働くか」といった「いかに」で答えるというのが、科学的探求の順序であろう。そして、「いかに」の答えには直ちに「なぜそのようなになっているのか」という「なぜ」の問いが立てられ得る。だから科学的探求には原理的に終わりはないのである。

研究にゆだねることとしたい。心理学という個別科学の研究者の一人としては、科学の方法論の意義はそれに基づいてその科学がどのくらい研究成果をあげるかにかかっていると考える以上、今は上述の渡辺の定義による「解明」を用いて進みたい。研究成果があがる中で「解明」という方法が、フッサール現象学本来の意味とは異なって来てしまったように哲学専門家の目には映じたとしても、具体的な心理学研究の中での「発展」と見なされることを期待したい<sup>1</sup>。

#### 2-4. 「群化の要因」がそこから派生する「現象のより基底的・普遍的な構造」とは？

くりかえすと現象学的解明とは、「個別的現象を、現象のより基底的・普遍的な構造に還元して理解すること」なのであった。すると、(たとえば)「近接の要因」がそこから派生する現象のより基底的・普遍的な構造とは何であろうか。

それは図と地の分化であろう。現代の標準的な教科書でも、図と地の分化は「知覚の体制化のもっとも初歩的な形」[5] (p.226) として、群化の要因に先立って取り上げられているだけではない(図3)。ゲシュタルト心理学とは離れたところに位置していた生物学的心理学の دونالد・ヘップでさえも、「図-地関係は、物体や空間領域を知覚する際に基本的なものである。成熟後に視覚をえた先天盲開眼者の行動から明らかにされたところでは、単純ではっきりした境界をもつ図形であれば、はじめて眼が見えたときから、そのまとまりだけは知覚できる。したがって、そのような対象の場合には、図-地関係は経験から独立している」[20] (p. 308) と述べている。

この図-地分化ということ踏まえれば、近接の要因とは、「2点が十分に近接していると知覚される場合、それらは同じ図に属することになるため、まとまりとして知覚される」というように表現できる。ここにはすでに、「なぜ近接して知覚される2点同士はまとまりとして知覚されるのか」という問いへの答えが見いだされている。くりかえしになるが、「近接して知覚される2点同士は、同じ図に属しているがゆえに、まとまりとして知覚される」のである。

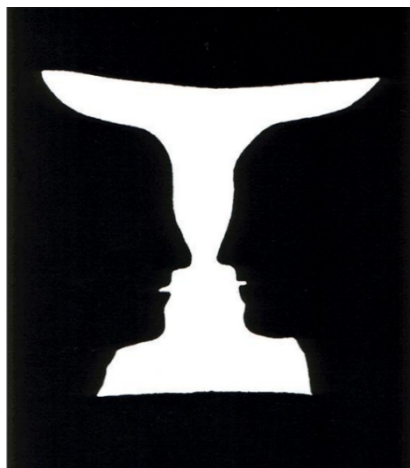


図3 図地分化の例としてしばしば取り上げられる両義図形「盃と横顔」[19]。この図の作者であるルビン (E. J. Rubin 1886-1951) がフッサール門下の実験現象学者であったことは、心理学の教科書ではまず触れられない。

<sup>1</sup> 哲学専門家との共同作業と言っても(哲學家は哲学専門家と見なす)、現象学における哲学と心理学の区別、もしくは棲み分けについて心理学者としてのスタンスを定めて置かない限り、分からないことや余り考えたくないことを、「共同作業」へと丸投げする口実に使われかねない。ここで次次項(2-5、本節のまとめ及び、現象学研究における心理学と哲学の関係)での議論を先取りしていえば、現象学研究における哲学と心理学の境界を絶対的に定めることは困難であり、問題に応じて関心相関的に棲み分けする他ない、ということになる。したがって本稿の、ゲシュタルト心理学における説明の様式を因果法則的説明から現象学的解明に代えるべきだという問題関心についていえば、まず渡辺の定義による「解明」を用いて進み、何らかの問題が生じた場合に、「フッサール現象学における解明とはなにか」という学史上の問題について哲学者・哲學家との共同研究を求めて「解明」概念の深化を図ってゆくというのが、心理学者としてのスタンスということになる。

ここで、「図」とは「まとまり」の言い換えに過ぎず、「近接して知覚される2点同士は、まとまっているがゆえに、まとまりとして知覚される」としか言っていないことになるのではないか、という当然の疑問が生じるかもしれない。そこで、近接の要因に関して今まで出てきた3種の解釈を、以下に比較することでこの点を明確にしよう。「近接」⇒「まとまり」の矢印の解釈に関して――

- ① コフから暗に前提としている科学的説明。「近接」は物理的実在としての距離の近接のことであり、物理的距離が現象的まとまりを因果的に規定するという関係になる。より基底的な水準は左辺であり、左辺⇒右辺と、因果的に規定する関係になる。
- ② 記述現象学的な説明。「近接」も「まとまり」も同じ主観的現象であり、現象という限りにおいて水準の差がない。ゆえに、実は左辺⇔右辺と表記されるのがふさわしいことになる。
- ③ 現象学的解明。主観的現象としての2点の近接感が強まれば、それは同じ図に属しているという、より基底的な現象の一例と見なされることになる（他の例として直ちに「類同」をあげることができる。「まとまり」を「同じ図に属する」ことと同義（だがより日常的表現）とすると、より基底的な水準は右辺であり、①とは逆転していることになる。この事態を、「近接して知覚される2点同士は、同じ図に属するという、より基底的な現象の構造の一例となるがゆえに、日常的表現でいうまとまりとして知覚される」と表現できる<sup>1</sup>。

これが、近接の要因という「個別的現象を、現象のより基底的・普遍的な構造」である図地分化体制に「還元して理解する」ことであり、つまりは近接の要因の現象学的解明を行ったのだと言えることができる。

## 2-5. 本節のまとめ及び、現象学研究における心理学と哲学の関係

以上、ゲシュタルト心理学における群化（体制化）の要因の中で、近接（及び類同）の要因を取り上げ、そこでの説明の形式を、自然科学的な因果的法則的説明の方向ではなく現象学的解明の方向へと精緻化してゆく方が、より納得がいく説明になることを明らかにした。同様のことが、群化の要因中の他の要因を含めたゲシュタルト心理学の知見全体に対しても言える可能性があると思われるが、詳しくは他の機会に譲りたい。

ここで、近接の要因を、図-地分化体制という「より基底的・普遍的な現象」に還元して解明したといっても、「なぜ図-地分化体制が成立しているのか」という「なぜ」の問いが、さらに生じるのではないと言われるかもしれない。これについてはゲシュタルト心理学では、すでに述べたように心理物理同型説的に、現象的図-地分化体制が成り立っているのは生理の水準でそのような体制が成り立っているからであり、さらに物理の水準で……というような方向が準備されたのであった。これに対して現象の面に留まって「なぜ」の問いを探究した例としては、フッサー<sup>2</sup>、グールヴィッ

<sup>1</sup> 「人は異なる群の要素間の距離よりも、知覚群内の要素間の距離のほうを短く判断する」という、2-2節に引用した逆の関係については、現象学的解明としてはどうなるだろうか。知覚群内の要素は同じ図に属する。他の条件が同一ならば同じ図に属するということには、違う図に属する場合よりも、現象的距離が短いという意味がすでに含まれている、となると思われる。

<sup>2</sup> フッサーの例を挙げておく。「ここでは、内在的現在にあたえられる統一的な感覚の場を観察し、その場のなかで、そもそもなにかがうかびあがって意識されるといったことはいかにして可能かを問い、さらに、いくつかのおなじようなものがうかびあがって意識されるには、どのような本質的条件がみた



チ[11]、メルロ＝ポンティ[22]があげられるが、これらの論者が心理学者ではなく哲学者であったことは、現象学的研究における心理学と哲学の区分もしくは棲み分けの問題を惹起するであろう。いったい図-地分化体制の成立そのものといった、より普遍的・基底的な現象の探求は、哲学者の領分になるのだろうか。

これについては、フッサール現象学を基に心理学の方法論の開拓にチャレンジしているジオルジ[23]の議論が参考になる。それによると、たとえば嫉妬という現象を明らかにする上で、心理学が求める嫉妬の意味 (meaning) は、理想的・普遍的で個人を超越するノエマの意味 (sense) とは異なるという。哲学的考察は、嫉妬 (jealousy) と羨望 (envy) の間を鋭く識別し、「嫉妬が起こる時には何時でも、私に属していると私が見なしている何らかの事物が、喪失される危険に在る。……他方、羨望は、もともと誰か他の人のものである何らかの事物に常に向けられている」(p. 231) といった理念的区分にまで達する。これに対して「心理学とは、世界内の状況に押し付けられた、個人化され、主観的に解釈された意味の研究」(p. 222) であり、「データが示すところでは、これら二つの情動 [嫉妬と羨望] は一つの状況の中で、混同された仕方生きられうる。……この発見は、他者、および自己についての感情が惹き起こされる具体的な状況においては、何故、これら二つの情動が混同されうるのかという問いを惹き起こす」(p. 232) といった問題領域が心理学であることになる。そして、哲学としての現象学はノエマ的な一般化にまで達するのに対し、心理学としての現象学をめざすのは「中範囲 (middle range)」(p. 223) の一般化だという。けれどもこのような区分は、何が「中範囲」かというそれ自体困難な問題を惹起してしまう以上、ノエマ的な意味に相当する域にまで達するか中範囲の一般化で留めるかは、そのつどの問題設定に応じて関心相關的に決まるという他ないのではないだろうか。すなわち、本稿の問題関心からすれば、「なぜ図-地分化体制が成立しているのか」の探求にまで現象学における心理学の領分を拡張すべきか、そもそも拡張できるのかは、将来の哲学者との学際的研究を踏まえて明らかになってゆく問題とする他ないと思われる。

なお、本節での現象学的解明の結果を踏まえれば、ゲシュタルト心理学にとどまらず心理学の他の潮流にも同様な問題があることが気づかれるので、次節で付随的に取り上げて本稿を、「もう一つの心理学史」の構想への糸口とするにふさわしいものとすべく努めたい。

### 3. 「心理学的説明」の納得しがたさを現象学的解明の視点から見直す

#### 3-1 心理学にあふれる無意味なトートロジー的説明

2節では、群化の要因を教科書で知った際に「何となく釈然としない」「近接したもの同士がまとまって知覚されるなど法則と称するにはあたりまえすぎる」と感じた個人的印象の経験を出発点としたのだった。このような印象は、実際、心理学史上に現れた心理学的説明の多くに感じ取られるものではないだろうか。たとえば渡邊[24]は次のような例をあげて批判の俎上に載せている。

……こうした無意味なトートロジー的説明は、心理学者のもっとも得意とするところである。

---

されねばならいかを問うてみよう」[21] (p.62)。

「自分がどうやって生きていったらよいか分からないのは、あなたのアイデンティティが混乱しているからなのです」などという無意味な言説は日常いくらでも見ることができる (p. 86)。

この例のように、心理学的説明では「アイデンティティ」といった観察不可能な「構成概念」(ibid., p. 81)が使われることが多いが、これを因果論的説明における原因として用いると無意味なトートロジーにおちいってしまう、というのである。渡邊が、マッコークォーデルとミール [25]やカルナップ[26]を基にして論じるところでは、構成概念は「傾性概念」(disposition concept)と「理論的構成概念」(theoretical construct)に分けられるものである<sup>1</sup>。「傾性概念は特定の状況下で観察された行動パターンを抽象的に記述しただけの概念であり、概念の意味内容は観察に完全に還元される。……心理学で用いられる「行動傾向」、「行動特性」などの構成概念は傾性概念と考えられる」[24] (p. 81)。これに対して「理論的構成概念は、傾性概念とことなり、観察に還元できない剰余意味 (surplus meanings) を持っている (引用者註：ここに本稿でいう文献[25]への参照番号が入る)。剰余意味は多くの場合、観察された行動パターンを規定する生体の内的過程など、外的な状況要因と基本的に独立な理論的実体と対応している」(ibid.)。上記の例の「アイデンティティ混乱」などは傾性概念であって、「自分がどうやって生きていったらよいか分からない」といった項目を含む多数の項目に対する多人数の自己評価の結果を統計的に処理するなどの操作によって、科学的・操作的に定義されるものなのである。つまり、このような因果論的説明においては「原因」は実のところ、「結果」から推論されるのでなく定義されている。だからトートロジーだということである。

### 3-2 「アイデンティティ混乱」の現象学的解明

しかしながら、「アイデンティティ混乱」を、(渡邊の用語法をあえて借りるならば) 傾性概念でなく理論的構成概念として理解する途はないのだろうか。その場合、「観察に還元できない剰余意味」は、「観察された行動パターンを規定する生体の内的過程など」ということになるが、マッコークォーデルとミール、カルナップ、渡邊らが依拠する論理実証主義＝操作主義＝行動主義の流れの中ではこれは神経生理学的過程ということになる。なぜなら、「内的過程」としては生理学的過程のみが現在は他者から (三人称的に) 観察されないが原理的に (計測技術の将来の発展などを想定すれば) 他者から観察可能であって、論理実証主義＝操作主義＝行動主義的な意味で科学的に問題としようからである<sup>2</sup>。これに対してゲシュタルト心理学＝現象学の流れでは「内的過程」には、当事者自身の、他者から観察される行動として表出される以前の「体験」が、本稿の流れの中での用語に従えば「主観的現象」が、含まれることになる。

議論を混乱させないために、渡邊[27, 28]が『質的心理学ハンドブック』等で提案している「認識論的解釈格子」の図を示しておこう。図4 (次頁) のように、操作主義・行動主義の潮流と現象学・ゲシュタルト心理学の潮流とは、「象限」つまり「心理学の対象」がそもそも異なっている。したが

<sup>1</sup> MacCorquodale & Meehl [25]では、媒介変数 (intervening variables) と仮説的構成概念 (hypothetical construct) の区別、カルナップ[26]では傾性用語 (disposition terms) と理論的用語 (theoretical terms) の区別にあたる。ここでは渡邊の議論にしたがう。

<sup>2</sup> 論理実証主義のヘンペル、操作主義のスチーヴンス、行動主義のスキナーらの流れでは、科学的な意味での心理学的観測とは、他者についての観測のみであるとされる。渡邊[27] (pp. 22-39) 参照。

ってここでの問題は、「アイデンティティ混乱」が「第1象限」では「傾性概念」に過ぎないとしても、「第3象限」に置き直してみれば何らかの、他者から観察できないだけでなく当事者にとっても簡単には整理した形でそれと識別できないような、体験のより基底的な構造、といったものに対応していないかどうか、ということになる。そのような体験構造がもし見出されたとすると、「どうやって生きていったら分からないのはアイデンティティが混乱しているからだ」という説明もまた、「なぜ」に答える現象学的解明として取り扱えることになる可能性がある。

周知のようにアイデンティティとは精神分析由来の概念である。精神分析では図4では第2象限におかれているので、「他者への視点」を取っているとみなされることになる。けれどもフロイトが夢研究を自己の夢の解釈から始めたように、また「アイデンティティ」の生みの親であるエリクソンにしてもその発想の源が自らの複雑な出自にあると言われるように<sup>1</sup>、自己への視点の密輸入もしくは、自他の視点の往復運動なくして精神分析もあり得ないように思われる。従って、アイデンティティの多様な形態を現象学研究の対象にすることは十分に可能と考えられる。具体的には、(これはエリクソン自身が行っていることだが) 自伝や手紙などの自己記述記録を収集し、現象学の基本方法である「本質観取」(=当該の体験が体験として成立するのに必須の体験構造:[16][23]参照)によって、「アイデンティティ」「アイデンティティ混乱」などの基本的概念に対応する基本的体験構造を明らかにしてゆくのである。

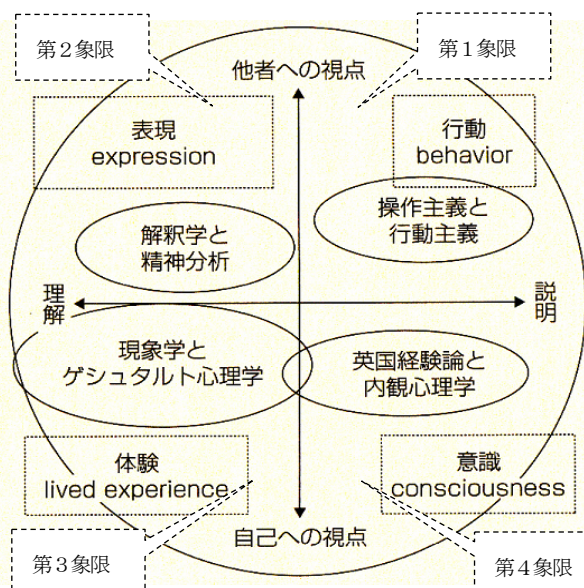


図4 「認識論的解読格子」。渡辺[27] (p.107)、渡辺[28](p.62)を元に加筆した。

具体的には、(これはエリクソン自身が行っていることだが) 自伝や手紙などの自己記述記録を収集し、現象学の基本方法である「本質観取」(=当該の体験が体験として成立するのに必須の体験構造:[16][23]参照)によって、「アイデンティティ」「アイデンティティ混乱」などの基本的概念に対応する基本的体験構造を明らかにしてゆくのである。

#### 4. 結論と展望

本稿では、まずゲシュタルト心理学から「群化の要因としての近接(と類同)の要因」をとりあげ、科学的説明としての納得の行かなさの根源を追求し、目指されている科学的説明を現象学的解明に代えるべきことを主張した。本稿で当初予定した範囲はここまでであったが、精神分析由来の「アイデンティティ」を用いた心理学的説明にも同様の問題があり、やはり現象学的解明に代える可能性があることにも気づくにいった。「群化の要因」も「アイデンティティ」も、それぞれゲシュタルト心理学と精神分析の代表的知見である以上、これらのことは次の事実を示唆していると思われる。(1) ゲシュタルト心理学か精神分析由来の心理学的概念を用いた心理学的説明の多くは、

<sup>1</sup> 「エリクソンは(自分自身の夢と記憶と空想について自分で調べたフロイトと同じように)、自分が目にしたことや彼自身の身近な出来事について自分が感じたことについて「調査研究」したのであり、そこから、さまざまな考え、論文、本へとつながっていったのであった[29](ii)。

科学的説明として「当たり前すぎる」「トートロジーである」といった納得の行かなさの印象を与えてしまう。(2) これらの説明は、説明項と被説明項に共に生理学的概念ではなく心理学的概念を用いている。(3) したがって科学であることを目指す限り心理学は、説明項か被説明項を(つまり独立変数か従属変数かを)生理学的概念(つまり生理学的変数)に置き換えざるを得なくなる。(4) これがまさに、現代、特に脳画像技術の飛躍的發展を背景として生じていることであり、心理学は認知神経科学の中に雲散霧氷してゆく恐れさえでてきている。(5) 本稿で行ったように心理学的説明の多くを現象学的解明へと置き換える—あえて言えば深化する—ことができるならば、このような潮流に対する有力なオルタナティブを提供することになるだろう。

第1節で述べたように、本稿は、(1) ゲシュタルト心理学を現象学として理解しなおす、(2) 現代に復興の兆しを見せている現象学的研究をゲシュタルト心理学からの方法的連続性の下に把握する、(3) プレンターノにまで遡られるもう一つの心理学史を構想する、という三つの課題からなる学際的総合研究のうち、主に(1)を扱うことで他の二つの課題への呼び水とすることを目指したのだった。本稿で得られた結論は、この学際的総合研究への単なる呼び水というにとどまらない、より明確な動機づけを提供していると思われる。すなわち、この研究には科学的心理学へのオルタナティブの可能性が懸かっているのである。そしてこれが、高橋[1]のいう「立ち消えになった認識革命」に含まれていた可能性であったと思われる。

## 参照 文献

- [1] 高橋滯子(2016)『心の科学史——西洋心理学の背景と実験心理学の誕生』〈講談社学術文庫〉, 東京:講談社(旧版『心の科学史——西洋心理学の源流と実験心理学の誕生』, 仙台:東北大学出版会, 1998).
- [2] Valsiner, J. (2005) Transformations and flexible forms: Where qualitative psychology begins. *Japanese Journal of Qualitative Psychology*, 4, 39-57.
- [3] Wertheimer, W. (1923) Untersuchungen zur Lehre von der Gestalt, II. *Psychologische Forschung*, 4, 301-350.
- [4] 大山正 (2016)「知覚」梅本堯夫・大山正(編)『新版:心理学への招待』(pp. 20-45), 東京:サイエンス社.
- [5] ノーレン-ホークセマ, S.・フレドゥリクセン, B.L.・ロフトス, G.R. & ワーゲナー, W.A. (2012)『ヒルガードの心理学 第15版』内田一成(監訳), 東京:金剛出版(Nolen-Hocksema, S., Fredrickson, B.L., Loftus, G. R., and Wagenaar, W. A. (2009) *Atkinson & Hilgard's Introduction to Psychology 15<sup>th</sup> Edition*. Cengage Learning EMEA.)
- [6] コフカ, K. (1998)『ゲシュタルト心理学の原理』(新装版), 鈴木正彌(監訳), 東京:福村出版(Koffka, K. (1935) *Principles of Gestalt Psychology*. London: Routledge & Kegan Paul Ltd.)
- [7] ケーラー, W. (1971)『ゲシュタルト心理学入門』田中良久・上村保子(訳), 東京:東京大学出版会.(Köhler, W. (1969) *The Task of Gestalt Psychology*. New Jersey: Princeton University Press.)
- [8] ヴァイツゼッカー, V. von (1976)『ゲシュタルトクライス——知覚と運動の人間学』木村敏・

- 濱中淑彦 (訳), 東京: みすず書房. (Weizsäcker, V. von (1940, 1950) *Der Gestaltkreis: Theorie der Einheit von Wahrnehmen und Bewegen*. Stuttgart: Thieme.)
- [9] アトニーブ F. (1968) 『心理学と情報理論—基本概念, 方法, 結果』小野 茂・羽生義正 (訳), 東京: ラティス (Attneave, F. (1959) *Applications of information theory to psychology: A summary of basic concepts, methods, and results*. New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc.)
- [10] コイファー, S., & チェメロ, A. (2018) 『現象学入門——新しい心の科学と哲学のために』田中彰吾・宮原克典 (訳), 東京: 勁草書房 (Käufel, S. & Chemero, A. (2015) *Phenomenology: An introduction*. Cambridge: Polity Press Ltd.)
- [11] Gurwitsch, A. (2009) *The Collected Works of Aron Gurwitsch (1901-1973). Volume II: studies in Phenomenology and Psychology*. Springer Science+Business Media B. V.
- [12] 柿崎祐一 (1979) 『心理学的知覚論序説』, 東京: 培風館.
- [13] 高木貞二 (1940) 「近接の要因」並びに「類同の要因」に関する実験的吟味. *心理学研究*, 15, 1-16.
- [14] デイルタイ, W. (2003) 「記述的分析的心理学」丸山高司 (訳). 大野篤一郎・丸山高司 (編) 『デイルタイ全集第3巻』 (pp. 637-756), 東京: 法政大学出版社.
- [15] 丸山高司 (2002) 「人間科学の方法論争」渡辺恒夫・村田純一・高橋濤子 (編) 『心理学の哲学』 (pp. 59-76), 京都: 北大路書房.
- [16] 渡辺恒夫 (2018) 他者になる夢の現象学的解明——フッサール志向性論に基づく主題分析. *質的心理学研究*, 17, 66-86.
- [17] フッサール, E. (1965) 『現象学の理念』立松弘孝 (訳), 東京: みすず書房 (Husserl, E. (1950). *Die Idee der Phänomenologie: Fünf Vorlesungen*. Den Haag: Martinus Nijhoff.)
- [18] フッサール, E. (1970) 『論理学研究2』立松弘孝・松井良和・赤松宏 (訳), 東京: みすず書房 (Husserl, E. (1928). *Logische Untersuchungen. Zweiter Band: Untersuchung zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis. I Teil. Vierte Auflage*. Halle a. d. S.: Max Niemeyer) .
- [19] Rubin, E. (1921) *Visuell wahrgenommene Figuren*. Kopenhaagen: Gylandalske.
- [20] ヘップ, D.O. (1975) 『行動学入門——生物科学としての心理学』第3版, 白井常・鹿取広人・平野俊二・金城辰夫・今村護郎 (訳), 東京: 紀伊国屋書店. (Hebb, D. O. (1972) *Textbook of psychology 3<sup>rd</sup> Edition*. W. B. Saunders Company.)
- [21] フッサール, E. (1975) 『経験と判断』長谷川宏 (訳), 東京: 河出書房新社 (Husserl, E. (1964). *Erfahrung und Urteil: Untersuchungen zur Genealogie der Logik*, Redigiert und herausgegeben von Ludwig Landgrebe, Dritte unveränderte Auflage. Hamburg: Claasen Verlag.)
- [22] メルロ・ポンティ, M. (1987) 『知覚の現象学』中島盛夫 (訳), 東京: 法政大学出版社 (Merleau-Ponty, M. (1945) *Phénoménologie de la perception*. Paris: Gallimard.)
- [23] ジオルジ, A. (2013) 『心理学における現象学的アプローチ 理論・歴史・方法・実践』吉田章宏 (訳), 東京: 新曜社 (Giorgi, A. (2009) *The Descriptive Phenomenological Method in Psychology: A Modified Husserlian Approach*. UA: Duquesne University Press.)

原著論文 渡辺恒夫 (2019) ゲシュタルト心理学と現象学—「立ち消えになった認識革命」からの出発

- [24] 渡邊芳之(1995) 心理学における構成概念と説明. 北海道医療大学看護福祉学部紀要, No. 2, 81-87,
- [25] MacCorquodale, K. & Meehl, P. E. (1948) On a distinction between hypothetical constructs and intervening variables. *Psychological Review*, 55, 95-197.
- [26] カルナップ, R. (1977) 「理論的概念の方法論的性格」竹尾知一郎 (訳), 『カルナップ哲学論集』 (pp.192-236), 永井成男・内田種臣 (編), 東京: 紀伊国屋書店. (Carnap, R. (1956) The methodological character of theoretical concepts. In *Minnesota Studies in the Philosophy of Science: 1*. University of Minnesota Press.)
- [27] 渡辺恒夫 (2014) 『他者問題で解く心の科学史』, 京都: 北大路書房.
- [28] 渡辺恒夫 (2013) 「質的研究の認識論」やまだようこ・麻生武・能智 一・サトウタツヤ・ (編) 『質的心理学ハンドブック』 (pp. 54-70), 東京: 新曜社.
- [29] コールズ, R. (2003) 「序文」。フリードマン, L.J. 『エリクソンの人生——アイデンティティの探求者 上』 (pp. i-iv), やまだようこ・西平直 (監訳), 東京: 新曜社 (Friedman, L.J. (1999) *Identity's Architect: A biography of Erik H. Erikson*. Scriber, an imprint of Simons & Schuster).

**【謝辞・付記】** 的確なコメントによって本稿のレベルアップに力を貸して下さった、2名の匿名の査読者に感謝いたします。

**【要約】** 心理学史家の高橋 (2016) はゲシュタルト心理学を立ち消えになった認識革命と特徴づけたが、この革命の可能性をつまびらかにするためにゲシュタルト心理学を再検討すべく、いわゆる体制化の要因 (ゲシュタルトの法則) の一つである近接の要因 (法則) を取り上げた。そこでなされている「近接した対象同士がまとまって知覚される」という心理学的説明の、科学的説明としての納得の行かなさの原因を分析し、科学的因果論的説明を現象学的解明に代えるべきことを主張した。現象学的解明とは、個々の体験事例をより普遍的な体験構造の一例として位置づけることであり、近接の要因の場合、図-地という知覚世界の最も根源的な構造の一例として位置づけることである。さらに、心理学的説明一般の納得しがたさを、アイデンティティによる説明を例にとって検討し、そこでも現象学的解明への置き換え・深化の可能性を論じた。結論として、説明項と被説明項の双方に心理学的概念を用いる心理学的説明の多くは現象学的解明へと置き換え・深化が可能であって、そのような深化の作業を通じての心理学史の見直しが、「立ち消えになった認識革命」からの再出発となると思われた。

**【キーワード】** 認識革命, 近接の法則, 心理学的説明, 現象学的解明, アイデンティティ